

## 論文の和文要旨

論文題目

セルビア語における対格名詞と動詞との組み合わせを  
めぐって

氏名

ヨカ サーニャ

日本語学では言語の現象の分析にあたって単語の語彙的な性質と文法的な性質との関係を考察することによって特定の現象が現れる条件を一般化し説明しようとする研究がある。その際、単語の語彙的な性質と文法的な性質の他にも、文中に現れる諸要素の間の相互関係も考え、文の構造を解釈しようとする。このような研究の中では奥田靖雄（1968-1972）「を格名詞と動詞とのくみあわせ」が興味深い。この論文では奥田はヲ格名詞と動詞の語彙的な性質と文法的な性質、更に、これらが現れる文の他の要素との関係も考察し、ヲ格名詞と動詞との組み合わせが作る体系を記述している。それにあたって、単に多様な意味的カテゴリーを分類しているのみならず、この体系におけるカテゴリー間の相互関係も徹底的に考察している。

日本語におけるヲ格名詞と動詞との組み合わせの用法はセルビア語の「前置詞なし対格」名詞と動詞との組み合わせに類似しているため、セルビア語における対格名詞の現れ方を理解する目的において、奥田の研究も参考にすることができる。セルビア語学では対格名詞の現れ方に関する研究は行われているが、このような方法論を使いその体系の分析を行った研究は見当たらない。そこで、日本語学の方法論に学びセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせに関する研究を行うことにした。

なお、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方には日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方に類似しているところが多いが、異なるところもあるので、両者を対照しながら、これらの類似点と相違点に関して述べた。

このように、本研究の目的は、第一に、セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を記述し一般化することによって、意味的カテゴリーを分類した上で、これら

の意味的カテゴリーの間の相互関係、連続性、特定の意味的カテゴリーから他の意味的カテゴリーへの移行に関して述べることである。そうすることで、その体系をより全般的に捉え、それにおける相互性の理解を深めることができる。また、セルビア語の対格名詞の現れ方を日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方に対照させることがもう一つの目的である。

以上の目的を持って、第六章ではセルビア語における対格名詞の現れ方のパターンに関して述べた。第七章から第十三章では対格名詞の現れ方の意味分類を挙げた。第十四章では対格名詞と動詞との組み合わせの体系におけるカテゴリー間の相互性に関して述べた。最後に、第十五章ではセルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせと日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの現れ方を対照してみた。

セルビア語の対格名詞と動詞との組み合わせり方は日本語の日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせり方とは異なる点もあるために、筆者はセルビア語の体系を徹底的に捉えるためにそれについてまとめた。セルビア語の対格名詞の現れ方には次のようなパターンがある。

- (a) 対格名詞的な単位の用法の基本的なパターン—本質的な対象的な関係を表わす組み合わせ：このパターンはほとんどの場合対象的な関係を表し、名詞が典型的に「直接目的語」という機能を果たしている。(obrisati trag 「跡を消す」など)
- (b) 二重対格の名詞的な単位を含む構造：このパターンは二つの対格名詞を含み、広い意味で「伝達」を表す。(učiti đake pesmu 「生徒に歌を教える」など)
- (c) 人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせ：主格名詞、対格の人称代名詞と動詞という三つの必須要素からなる構造である。(Boli ga noga. 「彼は足が痛い。)」
- (d) 組み合わせについて補充的な情報を与える対格の名詞：対象的な関係を表さず、物の量、物事の重さ、物事の価値や値段等を表し、動詞について補充的な情報を与えている。これらにおける対格の名詞は「副詞的補語」の機能を表す。

(Ovo teži jedan kilogram. 「これは一キロの重さがある。」)

- (e) 主部と述部で表す事柄について補足的な情報を与える対格の名詞：対格名詞は述語の意味に影響されず、状況を補足的に説明している。動詞と組み合わせを作らずに独立し文で表す事柄全体を補足的に説明していると言える。(To jutro je kašljao manje 「(彼は) その朝 少ない程度に咳をしていた。」)

対格名詞の現れ方の意味分類に関して言えば、動詞と組み合わせる現れ方と、動詞とは組み合わせらず、対格名詞が独立し主語と述部で表す事柄を外から表す用法がある。前者は最も典型的な現れ方であり、意味的なカテゴリーが多い。

対格名詞と動詞との組み合わせは大きく「対象的な関係を表わす組み合わせ」と「状況的な組み合わせ」が見られる。

「対象的な関係を表わす組み合わせ」は「対象に対する働きかけ」、「所有関係」と「心理的なかわり」に分かれる。

「対象に対する働きかけ」を表すものには「物に対する働きかけ」、「人に対する働きかけ」と「事に対する働きかけ」が見られる。それぞれがより詳細に分かれる。

「物に対する働きかけ」には物の「変化」(slomiti tanjir 「皿を割る」)、「付着」(obaviti toge oko grla 「喉にトーガを巻く」)、「除去」(otkinuti glavu sa voštane figure 「蠟人形から頭をはぎ取る」)、「移動」(prevoziti predmete iz Palate pravde u zgrade 「司法官から建物へ公文書を輸送する」)、「接触」(šakom stisnuti oba štapa 「手で両方の棒を押す」と「生産」(praviti lonce od gline 「粘土からなべを作る」)が見られる。

「人に対する働きかけ」は人の「生理的変化」(rasplakati glavnu urednicu 「編集長を泣かせる」)、「生理的な状態」(Boli ga noga. 「彼は足が痛い。」)、「心理的変化」(tešiti prijatelja 「友達を慰める」)、「心理的な状態」(Brine me njena bolest. 「私は彼女の病気が心配だ。」)、「空間的位置変化」(izbaciti glumce iz malog svratišta 「俳優たちを小さいたまり場から追い出す」)、「社会的場面での人

への働きかけ」 (zaposliti Bila kao konsultanta 「ビルをコンサルティングとして雇用する」)、 「人の行為の引き起こし/放任」 (puštati vojnike da se kockaju 「兵士たちに賭けをさせる」) に分かれる。

「事に対する働きかけ」には事の「変化」 (ubrzati tok stvari 「物事の流れを速める」) と「発見」 (izazvati krizu 「危機を起こす」) が見られる。

「所有関係」を表すものは「物持ち」 (imati pasoš 「パスポートを持つ」) と「授受」に分かれる。「授受」には「遠心的授受」 (dati Čarliju češalj 「チャーリーに櫛をあげる」) と「求心的授受」 (dobiti poklon od prijatelja 「友達からプレゼントをもらう」) が見られる。

「心理的なかかわり」を表す組み合わせは「認識の組み合わせ」、「伝達の組み合わせ」、「態度を表す組み合わせ」と「モーダルな態度を表す組み合わせ」に分かれる。

「認識の組み合わせ」には「感性的な組み合わせ」 (gledati film 「映画を見る」)、 「知的な組み合わせ」 (razumeti mehanizam rukovanja 「取り扱いのしくみを理解する」) と「発見の組み合わせ」 (naći rodake u Londonu 「ロンドンに親戚を見つける」) がある。

「伝達の組み合わせ」は「通達」 (ispričati prijatelju svoju životnu priču 「友達に自分の人生の話を語る」) と「教育目的の内容伝達」 (podučavati nekoga astronomiju 「誰かに天文学を教える」) に分かれる。

「態度を表す組み合わせ」は「感情的な態度の組み合わせ」 (voleti nekoga 「誰かを愛する」)、 「知的な態度の組み合わせ」 (smatrati egzaktne nauke zanatima 「精密化学を工芸とみなす」) と「表現的な態度の組み合わせ」 (pohvaliti nekoga da je kulturan 「誰かを教養があるとほめる」) のように分かれる。

「モーダルな態度を表す組み合わせ」には「要求的な組み合わせ」 (narediti oduzimanje životinja 「動物の没収を命令する」) と「意図的な組み合わせ」 (isplanirati vojnu akciju 「軍事行動を企てる」) が見られる。

「状況的な組み合わせ」は第一に「状況的な空間・時間を表す組み合わせ」と「状況的な量を表す組み合わせ」に分かれる。

「状況的な空間・時間を表す組み合わせ」は更に「空間を表す組み合わせ」と「時間を表す組み合わせ」に分かれる。「空間を表す組み合わせ」には「離れる過程を表す組み合わせ」(napustiti sobu「部屋を離れる」)と「通過を表す組み合わせ」(prepilvati reku「川を泳ぎ渡る」)がある。

「状況的な量を表す組み合わせ」は更に「狭義の量を表す組み合わせ」(potrošiti milion dinara「ディナールの100万を費やす」)、「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」(Ovo teži jedan kilogram「これは一キロの重さがある」)、「時間的な量を表す組み合わせ」(provesti jednu noć u hotelu「ホテルで一晩を過ごす」)と「空間の量を表す組み合わせ」(skočiti jedan metar「一メートル跳ぶ」)に分かれる。

対格名詞が独立し主語と述部で表す事柄を外から表す用法を「外的状況を表す対格名詞的な単位」と名付ける。「外的状況を表す対格名詞的な単位」には「外的時間・期間を表す名詞的な単位」(To jutro je kašljao manje 「(彼は)その朝少ない程度に咳をしていた」)と「外的回数・頻度を表す名詞的な単位」(Hiljadu puta ga je udario「千回彼を叩いた」)がある。

意味的カテゴリー間の相互関係を分析した結果、次のような傾向を確認することができる。

- (a) 構造の拡大によって一つの意味的カテゴリーから異なる意味的なカテゴリーが成立がする。
- (b) 組み合わせる要素の意味的な性質の変化によって新しい意味的カテゴリーが成立する。
- (c) 意味的な分類が難しく、特定の意味的カテゴリーにも完璧に分類できないものがある。
- (d) 二つの構造の混成によって、新しい構造が一時的に成り立つ、構文的コンタミネーションという現象が見られる。
- (e) 組み合わせる要素の特殊化に伴う慣用的な用法の成立が見られる。

最後に、セルビアの対格名詞と動詞との組み合わせの用法を日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせの用法に対照させた結果、次のことが分かった。

基本的な用法では両者が類似している (razbiti šolju 「コップを割る」、rasplakati dete 「子供を泣かせる」等) 部分が大きいのが、対象への働きかけが希薄になるにつれて相違点も現れてくる。その相違点は第一に「知的な組み合わせ」と「通達」の組み合わせで見られる。この意味的關係は日本語ではヲ格名詞と動詞との組み合わせが多く見られるが、セルビア語では「前置詞なし対格」名詞でなく、前置詞句が動詞と組み合わせる傾向が見られる (misliti na nečiji položaj 「誰かの身分について思う」)。

それに対し、セルビア語では社会的場面での「待遇関係」を表すものは対格名詞と動詞との組み合わせが頻繁に見られるが、日本語で二格名詞を取ることが多い (pozdraviti prijatelja 「友達に挨拶する」)。意味の範囲に関して言えば、セルビア語では「所有関係」を表すものは日本語より広い (imati gadnu narav 「気性がひどい」、imati bradu 「ひげをはやす」)、imati (dobrog) šefa 「(よい) 上司 がいる」)。

しかし、日本語では状況的な関係を表すものはセルビア語より範囲が広い。経路を表すヲ格名詞が移動動詞と組み合わせる傾向が頻繁に見られる (「道を歩く」等) が、セルビア語ではこのような意味的關係を表すためには具格名詞を使う (hodati ulicom 「道で歩く」)。また、離れる過程 (napustiti sobu 「部屋を離れる」) と通過を表す (preći planinu 「山を越える」) 点では両方の言語が類似しているが、セルビア語ではむしろ周辺的な用法である。更に、狭義の状況的な関係を表す組み合わせ (「人ごみの中を急ぐ」) もセルビア語では前置詞句と移動動詞との組み合わせで表される。

ただし、「狭義の量を表す組み合わせ」、「物事の重さ、物事の価値・値段を表す組み合わせ」と「空間の量を表す組み合わせ」が対格名詞と動詞が組み合わせで表される点では、セルビア語の方が範囲が広い。

なお、人の「生理的な状態」と「心理的な状態」を表す組み合わせはセルビア語の特徴であり、主格名詞を必須要素として含む。このような現れ方は日本語のヲ格名詞と動詞との組み合わせには見られない。